

米山梅吉記念館 館報

2007

(平成19年)

秋

Vol. 10



博文館は「太陽」を出して盛んなことであった。「太陽」は当時珍しい大雑誌で、亜米利加帰りの連中が揃って原稿料を稼がして貰ったことで、私もまた其の一人であった。(米山梅吉「思ひ出」より)

新聞記者志望だった米山は、アメリカ留学中から準備していた原稿を『提督彼理(ていとくべるり)』として1896年に出版した。これが縁となり、博文館の雑誌『太陽』に原稿が掲載されるようになる。1895年に創刊され1927年まで続いた『太陽』は、総合雑誌として明治年間に全盛期を迎えていた。

米山は、帰国直後の1896年から1924年までの間に、7回原稿を寄せているが、いずれもアメリカの現状および日米関係について語ったものである。1854年、ペリー来航がきっかけで結ばれた日米和親条約により、日本とアメリカは切っても切れない関係になった。『太陽』に掲載された文章は、アメリカの地に生活した米山の、率直な日米論であった。

現在、『太陽』は国会図書館、東京の三康図書館などで閲覧することができる。

上掲写真の資料は浅田光二氏(志木RC)から寄贈されたものです。



財団法人 米山梅吉記念館



館報第10号発刊に際して

理事長 内藤 成雄

時ならぬ大型台風4号に早々襲われて何とかやれやれと思う翌日、又しても新潟県中越沖地震に見舞れ、ダブルパンチに全国大変な対応に追われる毎日です。

全国のロータリアンの皆様、米山記念館です。被災された地区の皆様如何お過ごしでしょうか、お見舞申し上げます。記念館も風雨は激しかったものの被害なく済みました。

ロータリーも新年度を迎えました。全国的に会員減少の危機感の中、新執行部が工夫をこらして新しい意気込みで運営に取り組んでおられると思い敬意を表します。記念館の所在地区2620地区も、新CLPを取り入れ主要委員会に会員増強・退会防止を組みましたが、ロータリーの本命、職業・社会・国際・新世代の各委員会はそれぞれ独立して運動を展開しております。その中で米山記念館は相変わらず地区資金をはじめ多くのクラブ周年行事、全国募金等を含めて、往年よりは減少しておりますが、応分の御寄附を頂きおかげさまで運営を続けております。御来館の方々も追々増え、平成18-19年半期で3,000人を超えています。ありがたいことで何よりの励みになります。

2、3の現状を申し上げます。地元長泉町の懸案であった都市計画路線がいよいよ実施段階に入り、本館も入口の長屋門を含む土地28坪あまりの買収を通告されております。従わざるを得ない状況です。今まで館に到る道順が不案内であったのが、解決されるものの本館の記念物であった、たった一つの旧米山家の長屋門は撤去せざるを得ず苦慮しております。適当な移築

地もなく、老朽化のため基礎は古く移築に耐えられず、止むを得ずとり壊し案を先導し乍ら対策を講じています。跡地に記念碑と由来書の建設かレプリカ作製案もありますが、いずれにしても来る8月の理事・評議員会におはかりして決定したいと存じます。

今年は理事・評議員の任期満了に伴う新役員の選出という大仕事があります。

運営は井口常務理事、三枝地区委員長を中心にして近隣理事、運営委員会の皆さんの御奉仕で順調に行われ、只今秋の創立記念祭の準備中です。

記念館の存在の第一義は、米山梅吉翁の精神を継承し、学習し、ロータリーの初心の精神をいつまでも初々しく保つための機関だと思っております。国際ロータリーの動きも、その巨大組織の運営と世界規模の大奉仕事業遂行するには、巨額の費用を要するためさまざまな対策を立てるのは止むを得ないし、その組織の一員なので、義務は果たさなければならないのは当然です。さりとして四大奉仕なканずく職業を尊厳ならしめ奉仕するロータリーの精神はいささかも変わってならないと思います。世を憂えさす市場原理導入による利潤第一の経営トラブルが余りに多い現在、ロータリーの職業奉仕の理想に燃えた現在の会員が、一人でも多く同志を獲得し、入会させることを優先すべきだと痛感する次第です。記念館発行の記念誌「超我の人 米山梅吉の跫音」を読めば読む程その感を深くしております。

御来館心からお待ちしております。

春季例祭



講師
神崎 正陳 氏



内藤理事長挨拶



特別・周年事業寄附クラブの方々



朗読
服部けい子さん

二胡バンド
R-hoo



- 日時 2007年4月28日(土)
- 会場 (財)米山梅吉記念館ホール

● 例祭及び墓参

● 挨拶

(財)米山梅吉記念館
理事長 内藤 成雄
第2620地区
カバナー 井上 雅雄 氏

● 記念講演

演題 「春風のさそふがままに」
講師 ロータリーの友委員会
委員長 神崎 正陳 氏
(茅ヶ崎湘南RC)

アトラクション 二胡バンド **R-hoo**
朗読 服部けい子さん

● 懇親会



記念 講演

春風のさそふがままに

神崎 正陳

日本のウォリングフォードともいうべき、ここ上土狩の米山梅吉記念館でスピーチをする機会を与えていただいたことは、私にとって大変光栄なことです。内藤理事長から、話をしないかと言われるままに承諾をしてしまってから、さて何を話したらよいのか考え込んでしまいました。迷っているところへ、記念館からテーマを問われ困り果てた末、ふと井口先生が館報の中で、

二十保里 三十里台

春風の さそふがままに 満州を奥に

という米山先生の歌を紹介しておられたのを思い出して、春季例祭だから何がしかの縁もあろうかとこじつけて、「春風のさそふがままに」ということにした次第です。

ところで、米山先生がロータリーを正面から取り上げた歌は少ないようですが、昭和6年に「ロータリー・クラブ」と題して、

外国の 種はもかくは

榮え来て 咲き出づる花は 神ぞ見るらむと詠んでおられます。ガバナーをなさった最後の年に当たるのですが、藍壺歌稿には、その次に

もの言はで 足りなむ額

いつか来む 花の下かげ こみちなす目のという一首が載っています。この歌を私は大好きでして、「米山という名を告げてくださるな…」という、米山先生流の個人奉仕の精神に通じる、人生哲学を歌に託されたのではないかとと思っています。そこで、おこがましくも、

こみちなす 花下かげを

春風の さそふがままに さまよひゆかむといったような気持ちで、米山先生のロータリーを模索してみたいと思います。

1 米山先生には、多くの著書がありますが、翻訳を除くと、ロータリーに関するまとまった論文は地区大会等ロータリー諸会合での講演等は別として、少ないように思われます。

(1) そこで、先ず坂本記念館前理事長が発見された幻のガバナー月信を通じて、米山先生のロータリーの小路を探って見ることにします。次のような記述があります。(以下、下線は私が付し

ました。)

「蓋しロータリーの教えを待たずして、人類指導の道德・真理は古今東西同一なり。ロータリーに依らざるも世界の平和は企図さるべし。只我等は、奉仕の理想を根底に置き、一業一人友義を主として国際的に相提携する、此驚くべき組織に加盟する以上百パーセントのロータリーヤンたらざるべからず。」(昭和6年5月23日付)

「ロータリーは組織の性質上言葉少なにて、実行的に自然に理想の実現を期すべきもの。現在の六綱領を以て足り、重要なる役員委員等の職能を定め、一業一人・出席率主義以外は、其れ々々の発達に鑑むべきもの。規則を殖やし本部の事務を夥くするは考へ物と存候。」(同年6月5日付)

「ボケーショナル・サービスのことが長き間ロータリーの問題と相成居候が、此は其性質が不明なりしたために、最早解釈明瞭各くクラブ其主旨を体し居ることなるが、不思議に思はるるは、米国クラブにて絶えずインターナショナル・サービスを問題と致居候ことに候。欧州又は我邦などにては判かり切ったことにて、平生最も関心のことに候が、米国殊に其の或地方に於ては、之が取計に迷ふは無理もなき事情あること、ダニウェー博士の東京クラブに於ける演説にも徴され候。結局我々はロータリーのために此サービスの実行の機会を得るを喜び、米国人には大に国際関係を諒解して貰ひ度き處が、我々のR I 会員たる所以かと存候。」(同日付)

「我々はロータリーは其組織を飽くまでも簡単平易に止めて規則又は申合せの煩雑なるを避け、中央集権に傾かずして、可成各地方各国の事情に適応して其運動に宜しきを得るを大切と信ずるものなり。此の近世驚くべき精神的団体R Iの著しき発展は、固と超然として自ら存立する所以の道あればなり。」(同年6月30日付)

(2) 次に「常識関門」の中の「今日はロータリーの時代」の項に、以下のような記述があります。

「ロータリーは固と実業家専門職業人の団体である。…ロータリーは、独り心意状態に休止するものでなく、奉仕の実行を期するため、日

常の職務、社交並に公共的接触により、他人の為に計るの義務と自己を利せんとする欲望との衝突を調和して、人間の本分を尽くすために発奮努力しようとするのである。斯くて自己の奉仕を先だたせるのを人の為すべきたしきこととし、能く奉仕に力むれば自分を益することも亦大なりと信ずるのである。」

上に抜き出した文を読むと、米山先生がまことに的確にロータリー運動の本質を指摘しておられることが分かります。そして、アメリカのロータリーが昔も今も同じような傾向を持っていることも。

- (3) 理論的に整理された先生の文章とは別に、先生のくだけた生の声にも当たってみましょう。『常識関門』を書かれた年に先生は東京クラブで、「常識の重要性」という題でスピーチをされ、これが「東京ロータリークラブニュースNo.7」に速記起し文で掲載されています。生き生きとした先生の語り口が窺われて大変楽しい読み物になっています。ひとつふたつご紹介すると、

『常識関門』を読んださる大家が、学校の先生がトーキーを知らない、まことに常識がないと批判したことについて、「私これには少し不平がある。トーキーを知らなかったから常識がないとは云はない。これに似寄ったことで実は私はターキーと云ふ人を知らなかった…あの入江たか子と云ふ人をターキーだらうと思ってゐた。

(笑声) この間の会で其話をしてみると…ターキーを知らぬとは情ないと言ふ声が聞こえて抗議された。…寡聞で知らなかったと云ふことは何も常識を欠いて居る譯でない。…何でも其処にあるものを知って居ると云ふ事のみが常識でない。トーキーがどうの、ターキーがどうのと云ふ、そんな安価なものでない。もっと高価なものだ。判断が伴って常識だと云ふのである。」といったような調子です。

他にも、先生が愛読しておられたアメリカの大詩人ロングフェローの物語詩「マイルス・スタンディッシュの求婚」“The Courtship of Miles Standish”に触れて、大変興味のある話を展開されます。スタンディッシュという人は、1620年にメイフラワー号でプリマス港に上陸したビルグリム・ファーズの指導者なのですが、彼と一緒に船に乗ってきたプリシラ・マリンスという乙女を妻にしたいと思い、その仲介をジョン・オールデンに頼むのですが、実は若い二人は恋仲で、紆余曲折を経て結局はスタンディッシュが身を引くことになるまでの複雑な経緯を、ロングフェローが美しく詠い上げてい

るのです。ところが、ロータリアンにとってはこの詩は単なる恋物語詩ですまないのです。それは、プリシラとジョンがポール・ハリスの母方の9代前の先祖に当たるという説があるからなのです(ザ・ロータリアン1985年5月号「ポール・ハリスの系譜」参照)。米山先生は、難しい三角関係の中であってプリシラがとった態度を高く評価し、「これが最上のコモンセンスである。思ひやりのない人、同情のない人は、コモンセンスが欠けて居る…共存共栄でなければならぬと云ふ事が、今日で云ふコモンセンスのイデオロギーから出た一つの結論である。」と言われるのです。先生がポールの系譜のことを知らずにロングフェローの詩に傾倒し、プリシラを讃えたということに、洋の東西を分かち同い年のロータリーの偉大な先達の間に、不可思議なロータリーの因縁を思わざるを得ません。それはさておき、先生は常識論をさらに進めて、「汝の欲せざる所を人に施す勿れと云ふ事に行くのだと思ふ。」と結論されるのです。先生の「常識」は、凡人には及びもつかない高い境地にまで上り詰めて行く趣があります。

- 2 さて、このハイレベルの常識論はしばらく措いて、上(1(1))にご紹介した米山先生の考えと、きわめて酷似した説を、ロンドン・クラブの会員であったヴィヴィアン・カーターが、「ロータリー解説書」(原題“The meaning of Rotary”)で書いています。次のような件です。

- (1) 著書の冒頭で、「ロータリー運動の第一義的な目的は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成することにある。しかし、『奉仕の理想』という言葉はロータリー独特のもの(思想)としてロータリーによって宣言されたものではない。実際のところ真の起源がどこにあるかは、よく分からないと言ってよいだろう。多くの人はその起源を黄金律(新約聖書マタイによる福音書第7章第12節)に求めるが、黄金律に類似した幾つもの規律が存在する。

エジプト人は、『己の欲する善を他人のために求めよ』と表現し、

ペルシャ人は、『汝施されんと欲するところを施せ』と言い、

仏陀は、『人は己のために欲する福善を他人のために求むべきなり』、

中国の哲学者は、『己の欲せざるところを人に施すなかれ』と宣い、

ギリシャ人は、『汝隣人より受くる時悪となせることを隣人に受けしむるなかれ』と勧め、

モハメッドは、『何人も己の好まざるところとく同胞を遇すべからず』と命じ、

ローマ人は、『自己を愛するごとく社会の全員を愛すべしとは、万人の心底に銘せらるる法則たるべし』と記し、

モーセの掟からは、『何事にもあれ汝隣人の施すことを好まざるところを隣人に施すなかれ、これのみが掟でありその余は説示に過ぎず』と教えられ、

最後にナザレのイエスは、『すべて人にせられんと思うことは人にもまたその如くせよ』と説示された。

それゆえに「奉仕の理想」は人類の歴史とともにある古い思想だといえる。」

この多くの規律のうち、私が出典を知り得るのは、中国の哲学者…が孔子の論語衛霊公篇24、モーセ…が旧約聖書レビ記19章18節、イエス…(黄金律)、くらいで、後はカーターを信用するしかありませんが、古くから世界の各地で特定の宗教・哲学の流れと無関係に、利己と利他との関係についてほとんど同旨のことが言われてきたということは、真に驚嘆に値することです。なお、上の規律については、後にポール・ハリスが『ロータリーの理想と友愛』の中で奉仕の理想を解説するに当たって、そっくり引用しています(第11章参照)。

- (2) 「奉仕の理想」がこのように普遍的な倫理原則であるとする、ロータリー運動の特質というものは、どこに求めることになるのでしょうか。

米山先生とカーターの説くところに従えば、米山先生の言う「奉仕の理想を根底に置き」は普遍的原理なので、「一業一人と出席主義を採用した此驚くべき組織」こそが、特質だということになります。それにつけても、中国の哲学者(孔子)の「己の欲せざる所これを人に施すなかれ」(上掲の米山先生のスピーチでは「己」が「汝」となっていますが、意味は変わらないと思います。)という黄金率に類似した規律を、米山先生が常識と喝破したということは、「米山先生のロータリー」を理解するためには常に頭に入れておかなくてはならない重要な点だと言えます。

ここで、ポール・ハリスが最初のクラブを創った時に何を考え何をしたかを考えて見ましょう。

彼は、20世紀初頭のシカゴという大都会の生活の中で失われていた、社会を構成する人と人との信頼関係を回復したいと考え、そのひとつの方法として社交クラブを創ることを考えま

した。クラブを創れば、友達ができるはずだ。彼は、単なる遊び友達や仕事上の相談相手ではなく、心の底から信頼して話し合える友達関係(心の友)をつくりたいと思いました。その方法として彼は「同業者のいないクラブ」を考え、次に人間関係は定期的頻繁な交流がなければ疎遠になるので、「会合に積極的に出席するクラブ」を考えました。そして、この考えが、ロータリー・クラブの基本的な組織原則として明確にされました。つまり、ロータリー・クラブは理念に特色があったのではなく、クラブの組織原則に特色があったということは、ポールがクラブを創ったときからはっきりしていたことなのです。

- 3 しかし、戦前からアメリカのロータリー運動は、社会奉仕、国際奉仕に偏っていたことは先生が指摘したとおりです。今では、それは世界社会奉仕やロータリー財団においてより顕著です。このような現在の状況とロータリーの歴史の流れを冷静に認識しながら、私たちは、ポールが考え米山先生が把握していた、ロータリー・クラブの特質について、一度先入観を捨てて対してみる必要があるのではないのでしょうか。私たちはクラブ単位で、自主的にロータリー運動とは何かを深く掘り下げ、志を持って運動に参加し、普遍的原理であるロータリーの奉仕の理想をより明確にすべく努め、それを行動に移すために必要な独特の組織原則の意味と意義を再構成しなければならないでしょう。

古くから国際協議会で使われてきた、「入りて学び、出て奉仕せよ」というスローガンがあります。これは「ロータリアンは奉仕の心をクラブ親睦を通じて学び、職場や地域社会でその心を実践に移しなさい。」とパラフレーズすることができます。それは、「奉仕の心」の質を向上させることによって、より地域社会のニーズに適った奉仕の実践がなされることを求めているのです。

現在のロータリー運動の流れは、ひたすら他者への奉仕活動の数量的成果を追い求めます。“Those in need”に「手を差し伸べ」、「手を貸す」ことは、人間としてなすべき優れた徳であることに違いありませんが、本来は、手を差し伸べる人を、「一業一員・出席主義」によってクラブで育てることに、ロータリー運動の優れた特質があったのですから、育てる機能を捨てるとまでは言わずとも重要視しないのであるならば、それでもなおロータリー運動の特質が維持できることを、誰もが納得できるように説明がなされなければなりません。手を差し伸べる人徳と能力をすでに持つ人を、会員増強という方法でクラブの会員にすれば、それ

で足りるのでしょうか。そうではないことは明らかです。「一業一員・出席主義」をどう位置づけるかは、ロータリー運動そのものの存在意義を問う問題なのです。

ここで、一步下がって考えて見る必要があります。「一業一員・出席主義」は、ロータリー運動にとって絶対欠くことのできない必要条件でしょうか。冷静に考えれば、それは本来は「心の友」を得るためのひとつの手段だったのではないのでしょうか。しかもそれは、最初から絶対的な完結的な手段であったのでしょうか。異業種会員の間に業務上の厳しい対立関係や上下関係があるとすれば、それは「心の友」となることを阻害する要因となり得ます。また、同業者の概念を狭く解釈すれば、同業者排除は大幅に緩和が可能です。そうだとすれば「一業一員主義」は、「心の友」を得るための実効的な手段ではなく、象徴的な意味しかないということになります。こう考えてくると、「一業一員・出席主義」について、それに勝る優れて効果的な組織原則を案出することを考えるべきではないかという疑問が生じます。これはロータリアンが真剣に考察すべき課題だと思います。「世界は絶えず変化している。R I 定款が一業五会員を無条

件で認めるようになった以上、ロータリー・クラブは限定会員制などと女々しく言うな。いずれ同業者の入会を制限する規定はなくなるだろう。」と公言してはばからないロータリアンは大勢います。ロータリー・クラブというものが、会員間の親睦を醸成することによって、会員の人格の向上を目指し「奉仕の心」を高める場であることが、ロータリー運動の存在理由であるならば、「一業一員・出席主義」問題を実質的に解決しなければ、ロータリー運動の真の発展はありえないといっても過言ではないと思います。

米山先生は、1937年の春、緑岡小学校の入学式に臨んで、

今日よりと 新まなびやの

庭にさく 花にまきらふ 花のわらはべ

と詠まれました。先生から見れば、私たちは「花にまきらふ花のロータリアン」でしょう。ロータリーの例会という学び舎で学ぶ「わらはべ」としては、いつまでも「春風のさそふがままに」ただ彷徨っているわけにはいかないようです。米山先生の「こみち」を踏み外さないようにしたいものです。

以上

米山梅吉記念館 秋季例祭のご案内

日 時	平成19年 9月15日 (土)
	13:00 受付開始
場 所	米山梅吉記念館ホール
例祭次第	開 会 14:00
	理事長挨拶
	来賓挨拶
	記念講演 14:30~15:45
	演 題 「バーミヤンの仏教美術」
	講 師 静岡県立美術館 館長 宮治 昭氏
	アトラクション 16:00~16:30
	懇 親 会 16:45~18:00

原稿をお寄せください。

米山記念館へのご意見、館報を読んでのご感想、ロータリーについて等、何でも結構です。館報が皆様の意見交換・交流の場となるよう、ご寄稿をお待ちしております。

記 念 誌 編 集

余

話

(6)

米山梅吉と「新隠居論」 登載誌『実業之日本』

35周年記念誌編集委員長

井口 賢明

(沼津北RC)

米山梅吉の「新隠居論」初出の登載誌を見つけたことは『ロータリーの友』本年7月号で触れた。このことをもう少し敷衍したうえ、その登載誌『実業之日本』と米山のかかわり合いを見てみたい。

「新隠居論」は、米山の『銀行行余録』（日本評論社 昭02・09）に所収されているが、これが当初（大正3年）、どこで発表されたものなのか分かっていなかった。このため、幻の新隠居論などという人もいた。そんなこともあり、いつか最初の登載誌を探してみたいと考えていた。発表されたのは、内容が内容だけに、一般に広く配布される雑誌ではなく、講演をまとめたもの、それも所属する組織の会報などへのものかなと考えていた。会報とか機関誌に発表されたものとなると、探すのも大変である。それでも、二、三心当たりを探してみたこともあった。

その後、心には留めていたが、ずっとそのままになっていた。本年2月ころ、谷内宏文氏の手配で、青山学院初等部が昭和35年に発刊した『米山梅吉伝』の編集資料を見せてもらう機会があった。そのとき、『実業之日本』に「米山梅吉氏奮闘傳」という記事があることが分かった。それで、一度『実業之日本』を調べてみることにした。実業之日本社では、現在、バックナンバーを部外者には見せていないという。本年3月、国会図書館で、『実業之日本』の目次を繰った。雑誌によっては、著者名、題名などの索引ができているものもあるが、この雑誌はそれがない。しかし、すべての号の目次を複写し、これを製本したものがあった。「新隠居論」がこの雑誌に登載されているかだけを探すのであるなら、それほど労力を費やすこともない。大正3年の1年間だけを確認すればいいからである。でも、米山の他の文章があるかも調べたかつ

たので、とりあえずは、最初から繰ってみた。

大正3年のときのものを調べるときは、あるかどうか、胸が高鳴るようであった。あってくれば、これからの探査の仕事も終ると祈るような思いでもあった。大正3年8月15日号、17巻17号、探し当てることができた。正直、やったという思いであった。一方では、こんなにあっさり見つかり、拍子抜けの感もあった。

後から思えば、最初から、『実業之日本』を当たるべきであった。というのも、「新隠居論」の文章のなかに「余は昨秋発行されたる『実業之日本』増刊号「此機会」にも述べて置いた如く」というヒントの一文があるからである。しかし、結果論である。

『実業之日本』という雑誌は、明治30年6月に創刊された。このころは、実業という言葉がそれ程一般的でなく、農工商とか産業といったという。実業は、英語のビジネスの翻訳のようであるが、『実業之日本』により、実業という言葉が広く流布されるようになった。

世界で最も古い経済雑誌は、イギリスの『エコノミスト』（1843年創刊）だそうである。日本では、『東京経済雑記』（明治12年）、『東洋経済新報』（明治30年）、次いで『実業之日本』だという。

当初の発行人は、光岡威一郎であった。増田義一は、この光岡と東京専門学校（後の早稲田大学）以来の友人で、読売新聞に勤務する傍ら、『実業之日本』の編集に当初から携わっていた。その後、光岡の健康もあって、増田は、明治33年5月、『実業之日本』の発行を引継いだ。

この雑誌は、明治32年には、月刊から月2回の発行となった。その後、長い命脈を保ち、平成14年2月まで105年も続いた（通巻2357号）。

増田は、新潟県出身で、後に代議士となり、昭和17年には、8回目の衆議員当選を果している。大変な活動家で、各地に講演、文筆にと多彩な活動をした。また、ロータリーでいえば、大正10年7月、成立間もない東京RCに入会している（ただし、大正13年5月に退会）。

増田は、「他人に迷惑をかけない、他人から物質上の援助を絶対にうけない。」ということを変の信念としていた。この雑誌が長く続いたのもこれが理由の一つかもしれない。

米山がこの雑誌に文章を書くようになったいきさつはわからない。米山最初の文章は、明治44年10月であるが、その1ヶ月前に米山に関する記事が出ている。大正3年ころから、米山の文章、米山に関する記事が目につくようになる。とにかく、米山の文章が相当数あり、米山に関する記事も数え切れない。米山の実業界における存在感が伝わってくる。そして、米山（『実業之日本』大正6年1月1日号）山に関する記事では、積極評価のものが大勢である。

「新隠居論」が発表されるにいたった時代背景、米山の状況は、谷内氏が『点描』のなかで詳しく論じている。全く納得し得るもので、これを云々する余地はない。

米山がこれを発表するにいたったいきさつは、どのようであったか。米山自らがなにがなんでもこの文章を発表しようとしたということではなさそうである。「新隠居論」の末尾に担当の記者による次のような記事がある。「人間は最期までその事業に奮闘すべしといふ説があるとすれば、今は青年の時代なり、老人退隠すべしとの声も低くない。老人は退隠すべきものか否か、事業の性質種類に

より異なることなきか、隠退後は何を爲すべきか。記者は此点に関し米山氏其他二三名士の意見を叩いた。次号には 隠居賛成論 小川鮎吉 を掲ぐべし。」とあり、次号予告の目次にも「隠居論は賛成 明治製糖社長 小川鮎吉」とある。

これからすると、実業之日本社側で、このような文章を書ける人を探したともいえる。記者は、それまでも米山のところに入出入りしていて、この論題に関する米山の意見を知っていた。それで、隠居賛成の立場からの文章を書かせたということになりそうである。もちろん、記者が米山を促したとしても、米山にそのような思いがなければ、発表につながらない。すなわち、米山の考えと実業之日本の記者が追い求めようとしていたことがうまく合致した。

それにしても、自身が引退をしてそのような立場にあるなら、この文章を発表する決断もたやすい。しかし、米山は、47才、三井銀行の常務として働き盛りである。そうそうたる年配者が活躍しているなかで、このような文章である。自身の未来を見すえ、自分の今後に余程の信念をもっていないとできない。

この文章は、周到に考え、練られた文章である。いわば米山自身の人生哲学の指針のようなものである。米山は、この指針ともいうべきものをその後の人生において、着々と実現していく。まるで、タイムマシンで先に行って、自分の歩いた道をかいま見てきたようでもある。「新隠居論」の内容を自分の使命と考え、行動する強い思いが知られる。

米山のこの文章は、大変な反響を与えたと思われる。先の記者の文章には、次号には、「隠居賛成論小川鮎吉を掲ぐべし」とある。そして、次号予告もされている。『実業之日本』は、月2回の発行である。「新隠居論」掲載号が発行されるときは次号掲載予定の小川原稿が既に編集者に渡っていた可能性が大きい。ところが、次号にもその次の号にも、この小川の「隠居論は賛成」の文章は載っていない。また、この論題について、他の人のものがないようである。これをどう考えたらよいのであろうか。どこかから物言いでもあったのであろうか。



岡本一平「初対面録」

「新隱居論」対比

實業之日本（大3．8．15）

◎年を老れば古來隱居した

余は獨り我が實業界と謂はず社會各方面の老人株に向つて、御隱居なさいとお勧めしたいのだ。

隱居の由來は、今更余の説明するまでもないが、思ふに中古に在つては隱居は宗教上から來たもので、人間名利の巷から脱却して法門に歸依するといふ、所謂遁世的の意味を有して居つた。

降つて戰國時代には降參謝罪の意味に於て隱居といふことが行はれ、近世に至つては全くその人一個の平和安樂の爲めに行はれて居たやうである。故に其の功成り名遂げて身退くものは勿論、然らざるも苟も家を繼ぐに足り安心の境遇に在るものは必ず隱居した。

要するに、年をとれば隱居するといふのが昔からの仕來りである。

◎維新の時代と人物の關係

然るに明治の御代に於ては、日本は世界の文明各國と猛烈なる競争をしなければならぬ時代に入つた。そこで老人と雖も隱居して居る場合でないと言つて、皆が大に社會の各方面に活動し、また髓にそれ等の人達のさう云ふ氣組に依つて、日本の文明は進歩し、國運は發展したに相違ないのである。併し更に一步を進めて維新の初めと其當時の人との關係を考へて見たい。

日本が歐米と接觸して、社會の状態が俄然一變したと云ふことは實に非常の事であつて、此の特別稀有の現象の下に今日の老人、當時の青年は抑も如何なる機會に出逢つたので有らうか。

余は昨秋發行されたる實業之日本増刊「此機會」にも、述べて置いた如く、凡そ世の中には機會といふものが三通りあると思ふ。その第一は所謂千載一遇の好機會で、風雲に際會したいろんな人物が現はれて來て功業を建てる、歴史上に一時期を劃するやうな大革命とか大戦争とか云ふやうな時である。第二にはその人の一世一代の幸不幸の分岐點ともなるべき生涯に一度しか來ないと云ふやうな大切な機會である。第三は日常身邊に群起して來る處の千種萬様の小機會である。

所謂歴史上に一時期を劃するやうな機會とは明治維新が夫である。かう云ふ機會に逢遇した人達は、並大抵の人物で苟も一藝一能さへあれば成功は意の儘であつた。況して拔群の士にして大志を抱けるものは無論の事で、殊に内亂的の革命などと違ひ、文明に促されたる時勢の激變であつたから、新智識を持つた青年は殊に尊重され又た得意であつた譯で、滅多に類例を見ない成功を占める事が出來た。そうして比較的長く榮譽を維持することが出來た。

◎僅な年所の差で幸不幸の大差あり

併し維新の時代は去り、此の千載一遇の好機會を捕へた人達と、其人達より何年か後れて出て來たもの、又は略ぼ年輩を同じくするも其の出身地を異にして居つた人々との間には大なる溝渠を生じ、幸不幸の差が餘りに著しく、隨分失意者の人の不平談もあつたので實際如何に勉強努力しても、もう數年前の人達が功名富貴手に唾して取ると謂つた風に左様無難作には行かない。茲に於て或者はその成功者の後塵を拝し、或者はそれに反抗して行くの外はなかつた。

然るに明治も既に四十五年、世は大正に入りて早くも三星霜

銀行行餘録（昭2．9．20）

余は獨り我が實業界と謂はず社會各方面の老人株に向つて、隱居することを勧告したいのである。

隱居の由來は、今更余の説明するまでもないが、思ふに中古に在つては隱居は宗教上から來たもので、人間名利の巷から脱却して法門に歸依するといふ、所謂遁世的の意味を有して居つたに相違ない。

降つて戰國時代には降參謝罪の意味に於て隱居といふことが行はれ、近世に至つては全くその人一個の平和安樂の爲めに行はれて居たやうである。故に其の功成り名遂げて身退くものは勿論、然らざるも苟も其嗣の家を繼がしむるに足り安心の境遇に在るものは必ず隱居した。

要するに年をとれば隱居するといふのが昔からの仕來りである。

然るに新なる日本は、幸か不幸か世界の文明各國と猛烈なる競争を爲なければならぬ時代に入つた、故に老人と雖も隱居して居る場合でないと言つて皆な大に社會の各方面に活動する様になり、これ等の人達のさう云ふ氣組に依つて、

日本の文明は進歩し國運は發展したに相違ないのである、併し更に一步を進めて維新の初と其當時の人との關係を考へて見たい。

日本が歐米と接觸して社會の組織が俄然一變したと云ふのは實に未曾有の事であつて、此の天下稀有の現象の下に今日の老人當時の青年は、抑も如何なる機會に出逢つたので有るか、余は昨秋發行されたる「實業之日本」増刊「此機會」にも述べて置いた如く、凡そ世の中には機會といふものが三通りあると思ふ、その第一は彼の千載一遇の好機會で、所謂風雲に際會した色々な人物が現れて來て功業を建てる、歴史上に一時期を劃するやうな大革命とか大戦争とか云ふやうな秋である、第二にはその人の一世一代の幸不幸の分岐點ともなるべき生涯に何時か屹と出逢ふことのある大切な機會である、第三は日常身邊に群がつて來る所の千種萬様の小機會である。

所謂歴史上に一時期を劃するやうな機會とは明治維新が其である、斯う云ふ機會に遭遇した人達は、少々平凡でも苟も一藝一能があれば成功は意の儘であつた、況して拔群の士にして大志を抱けるものは無論の事で、單に内亂的の革命と云ふ許りでなく文明に促されたる時勢の激變であつたから、新智識を持つた青年は殊に尊重され又た得意であつた譯で、滅多に類例を見ない成功を占める事が出來た、そうして比較的長く榮譽を維持することが出來た。

併し維新の時代は去り、此の千載一遇の好機會を捕へた人達と其より幾年か後れて出て來たもの、又は略ぼ年輩を同じくするも其の出身地を異にして居つた人々との間には大なる溝渠ができ、運不運の差が餘りに著しく隨分失意の人の不平談もあつたので、實際如何に實力があつて見ても、もう數年前の人達が功名富貴手に唾して取ると謂つた風に左様無難作には行かない、茲に於て或者は前の成功者の後影を拝し、或者はそれに反抗して行くの外はなかつた。

然るに明治も既に四十五年、世は大正に入りて早くも三星霜

を閲して居る。維新變革の當時より指折り數ふれば四十有七年を経過して居るが、尚ほその當時の成功者が残存して、今に牢固として抜くべからざる勢力を有して居る。維新の當時或る圈内に這入つて居なかつた人の運命は前にも言つた通り。而して更に是等のより十年廿年時を隔てゝ生れた人は尋常一様のことで前日の如き成功の出来る筈がなく、生存競争の激甚となつた社會に立ちて一生懸命に働き、各々其運命の開拓に力めるのであるが、その骨の折れる事と謂つたら容易なものでなく、轉た人をして、年所の僅かの相違でも時勢の如何に依つて人々の幸不幸が斯くまでも大差を生ずるものかと嘆息せしむるのである。社會は固より常に公平のものでは無い。併し維新の功業が其時代に人の上に授けた榮冠は、如何にしても特別の事情に出づと謂はねばなるまい。

◎老人跋扈の弊害

それ故若しその當時の成功した人、また直接勲業に與らずとも、それ等の人の庇護蔭縁に依りて閑と云ふやうなものが出来て所謂元老又はその關係に依つて勢力を有する老人達が何時何時までも立つて居ることとなると、年配其他の點に於て後列に在る人達は、何時迄も志を伸す機會を得ずに果てるであらう。其丈に止まらず老人が仕者を押え附けて居ると、仕事の上にも弊害が甚だしくなる。

余は更に此處に一論が有る、凡そ人は其職務に對して適當の持分が無くてはならぬ筈であるが、日本の社會程此の持分が少なく、又は其範圍の不明瞭な所はあるまい、之れは人が多くして仕事の少ないと云ふ原因からも来るであらうが、實は老人株が何處迄も頑張って何事にも干渉し、近頃の流行語で言へば兎角非立憲の事が行はれるので、各方面に物事の規則正しい進行を見ることが困難となるのである、無益の事であるからと云つて直ちに廢止も出來ず、必要なればとて容易に實行も出來ず、判斷の根拠を理窟に求めずして、老人株の指図に待たざるを得ない場合が多くある。仕事をする困難は其力量の如何よりも、先づ老人株の同意を得て行かなくてはならぬと云ふ事に在る斯んな風であるから、各個が職務上の持分さへ守れば宜いと云ふ譯には行かぬ。従つて責任の觀念が乏しくなる。且夫れ人には経験と云ふものは最も貴ぶべきものであるにも拘らず、充分に人を働かさぬために大切な経験を積むことが割合に少く、亦之を積むも充分に利用實施することの出来ない事情にある。如此は實業界に取ては特に大なる損害を帶來すもので有る。

◎日本の隠居と西洋の隠居の相違

昔は六十にして軍隊を免ず、七十にして致仕すとあつた。上來述べた理由で、とりわけ日本の現在の状況に於ては老人達が特に隠居すべき理由がある、少々早目にも左様しなければならぬと思ふ。然らざれば後の人が困る、隠居は必ずしも安逸を



『実業之日本』大正3年8月15日号

(国会図書館所蔵)

それ故若しその當時の成功した人、また直接勲業に與らずとも、それ等先達元老の人の蔭縁庇護よりして閑と云ふやうなものが出来て、その關係に依つて勢力を有するに至つた人達が老いて何時までも存立して居ると云ふことになると、年所其他の點に於て後列に在る人達は

何時迄も志を伸す機會を得ずに果てるであらう、否な其丈に止まらず、若し老人が仕者を壓倒して居るとなると事業の上にも弊害が甚だしくなる。

余は更に此處に一論が有る、凡そ人は其職務に對して適當の持分が無くてはならぬ筈であるが、日本の社會程此の持分が少なく又は其範圍の不明瞭な所はあるまい、之れは人が多くて仕事の少ないと云ふ原因からも来るであらうが、實は老人株が何處迄も頑強で何事にも干渉し、近頃の流行語で言へば兎角非立憲の事が行はれるので、各方面に物事の規則正しい進歩を見ることが困難となるのである、無益の事であるからと云つて直ちに廢止も出來ず、必要なればとて容易に實行も出來ず、判斷の根拠を理窟に求めずして老人株の氣嫌に待たざるを得ない場合が多くある、凡そ仕事をする困難は其力量の如何よりも、先づ老人株の同意を得て行かなくてはならぬと云ふことに在る、斯んな風であるから、各個が自分の職務上の持分さへ守れば宜いと云ふ譯には行かぬ、従つて責任の觀念が乏しくなる、且夫れ人には経験と云ふものは最も貴ぶべきものであるにも拘らず、充分に人を働かさぬために大切な経験を積むことも割合に少く、亦之を積むも充分に利用實施することの出来ない事情にある、如此は實業界に取ては特に大なる損害を帶來すものと謂うべきで有る。

昔は六十にして軍隊を免じ七十にして致仕すとあつた、上來述べた次第により特に日本の現在の状況に於ては老人達の早く隠居すべき理由がある、少々早目にも左様しなければならぬと思ふ、然らざれば後の人が困る、隠居は必ずしも安逸を食

を閲し、維新變革の當時より指折り數ふれば四十有七年を経過して居るが、尚ほその當時の成功者が残存して今に牢乎として抜くべからざる勢力を留めて居る。維新の當時或る圈内に這入つて居なかつた人の不運は已に言つた通り、而して更に是等のより十年廿年時を隔てゝ生れた人は、尋常一様のことで先進の如き成功の出来る筈がなく、生存競争の激甚となつた社會に立ちて一生懸命に働き、各々其運命の開拓に力めるのであるが、その骨の折れることは並大抵でなく、轉た人をして、年所の僅かの相違でも時勢の如何に依つて幸不幸が斯くまで大なる差を生ずるものかと嘆息せしむるのである、人間社會は固より常に公平のものでは無い、併し維新の功業が其時代に廻合せた人の上に授けた榮冠は、如何にしても特別の事情に出たと謂わねばなるまい。

貪る東洋の陋習とのみ謂うべきに非ず。西洋にも行はれる事で、唯だ隠居の仕方を異にするばかりである。

我國に於ける隠居は全然世の中から藏れて了ふことを意味する。従つて未練も残り、爲しにくゝもなるが、歐羅巴人の隠居は隠居すると共に世の中と没交渉になるのではなくて隠居は隠居として爲すべき幾多の仕事がある、即ち今まで職務に忙しく逐はれて出来なかつた處の人間として盡すべき義務を盡すのである。人間は自分の稼業以外、職掌以外に何か社會公衆の爲めにする所が無くては、

まだ人間としての義務を充分に盡したとは言へない。西洋人の隠居後に爲す仕事は此意味に於て社會の爲めに盡すことである。之を人間報恩の爲めと云ふ亦可なりである。

◎隠居者の爲すべき事業

然らば歐洲人は隠居して後どう云ふことをして居るか云ふに、政治上のことも隠居後の樂みの一つであるが、それは暫らく別としても、隠居者の爲すべき事は多い。西洋では自分の仕事を早く壮年者に譲つて、市町村自治團體の世話又は學校病院その他公益の事に盡す人が多いのみならず、さう云ふことをするのが紳士の理想と云つても宜い程のものである。英國などに於ては實業家が成功を爲し終つて始めて政界に入る例も多い、最近死んだチエムバレイン氏の如きもその大なるものゝ一人だ、但し政界に入る人は比較的老境に入らぬ以前に入るやうだ。

政治は一種特別であるが、前に言つた通り其他に隠居して爲すべき公益事業は非常に澤山にある。そこで余の我邦の元老は勿論凡そ成功せる老人株の人達に望むのは、隠居してかう云ふことをして貰ひたいのである。此の意味に於て、適當の時期に於て隠居せられんことを切に勧める。彼等が隠居をしてさう云ふ方面の世話をしないから、日本の公共的の事業は旨く行かないのだ。試みに見よ、その發起されたる趣意の如何に善美にして實績の擧げざることの如何に多きかを。日本の公共事業は衣食に汲々たるものがやつて、功成り名遂げて餘力に富んだ老人達がやらないからだ。

◎元老は公共事業

例せば我邦最大の慈善博愛を標榜する某團體の如き上は皇室より下は全國の國民を網羅して其の會員と爲し、至高至清、嚴として犯すべからざるものであるに拘らず、何か其裏に不始末があつたものと見え、曾てゴロッツ新聞に恐嚇されて若干金を取れたと云ふことが有つた。これ等も何處かに弱點があつたからだ、悲しむべきことである。而して其以下のものに至ては本當に監督し世話をする人がなく、それに依つて衣食する人間の手に任せ善美なる名目の下に集められた金は無益に費されて了つて居るものが多い、我國に於ける各種の公共事業が如何に不適當の人に依つて首唱せられ、且つ經營せられつゝあるか。少しくその間の消息を知るものは何人と雖も痛嘆措かない所である。

茲に於て余は特に我が實業界の元老に向つて其の名譽と信用とに加ふるに貴重なる經驗を以てして、大に各種公益事業の世話を焼いて貰ひたい。看來れば日本の社會は改善を要することが澤山ある、

公徳は頓と重んぜられず、亂暴狼籍の事が少くない、社會の弊風を矯正すると云ふ様の事には最も觀察注意の行届く、余の所謂隠居者にして始めてやり得ることである。

即ち彼等は日本帝國の權威でなくてはならない、又左様あらんことを望む。

東洋の陋習とのみ謂うべきに非ず、西洋にも行はれることで、唯だ隠居の仕方を異にするばかりである。

我國に於ける隠居は全然世の中から藏れて了ふことを意味する、従つて未練も残り斷行が爲しにくゝもなるが、西洋人の隠居は隠居すると共に世の中と没交渉になるのではなくて、隠居は隠居然として爲すべき幾多の仕事がある、即ち今まで職務に忙しく追はれて出来なかつた人間として爲すべき所の義務を盡すのである、人間は自分の稼業以外職掌以外に何か社會公衆の爲めに奉仕する所が無くては、まだ人間としての義務を充分に果たしたとは言へない、西洋人の隠居後に爲す仕事は此意味から社會の爲めに盡すと云ふのである、之を人間報恩の爲めと云ふ亦可なりである。

然らば西洋人は隠居して後どう云ふことをして居るか云ふに、政治上のことも隠居後の樂みの一つであるが、それは暫らく別としても隠居者の爲すべき職分が少くない、自分の事業を早く壮者に譲つて、市町村自治團體の世話又は學校病院その他公共の事に務める人が多いのみならず、さう云ふことをするのが紳士の理想と云つても宜い程のことである、英國に於ては實業家が其成功を告げて始めて政界に入る例が多い、最近死んだチエムバレイン氏の如きもその大なるものゝ一人たるを失はぬ、但し政界に入る人は比較的老境に入らぬ以前に於てするやうである。

政治は一種特別であるとしても、前に言つた通り其他に隠居して爲すべき公共の事業は澤山にある。そこで余の我邦の元老連は勿論凡そ成功せる老人株の人達に望むのは、隠居してかう云ふことをして貰ひたいからである、此の意味から先輩の適當の時期に於ては隠居することを切に勧める、其人達が隠居をしてさう云ふ方面の世話をしないから日本の公共的の事業は兎角旨く行かないのである、發起されたる趣意の如何に善美にして然かも實績の擧げざる實例が隨所に多い、日本の公益事業と云ふものは之に依りて以て衣食に従事するものが遣り、功成り名遂げた老人達が與らないのは遺憾である。

例せば我邦最大の慈善博愛を標榜する某團體の如き、上は皇室より下は全國を網羅して其の會員と爲し、至高至清儼然として犯すべからざるものであるに拘らず、何か其裏に不始末があつたものと見え、曾て悪徳新聞に恐嚇されて金を出したとか云ふことがあつた、これ等も何處か缺陷があつたからで悲しむべきことである、況して其以下のものに至ては本當に監督し世話をする有力な人がなく、

善美なる名目の下に集められた金は放任されて無意義に費され勝ちな場合が多い、我國に於ける各種の公益事業が如何に不適當の人に依つて首唱せられ且つ經營せられつゝあるか、少しくその間の消息を知るものは何人と雖も痛嘆措かない所であらう。

茲に於て余は特に我が實業界の元老に向つて、其の名譽と信用とに加ふるに貴重なる經驗を以てして、大に公益事業の世話を焼いて貰ひたいのである、看來れば日本の社會には改善を要することが眞に澤山ある、第一に日常生活上の公徳と云ふものが頓と重ぜられず、亂暴狼籍のことが到る處に多い、社會の弊風を矯正すると云ふやうのことは、最も觀察注意の行届く筈の所謂隠居株にして始めて之に當り得るのである、即ち功名を遂げ富貴でそうして經驗を持った老人は日本の權威であり國寶でなくてはならない、そうして其老後の務めが前に述べ來つたやうになることを望むのである。

JGFRとチャリティ 第2620地区 島田RC 永井 鐵也

日本ロータリー親睦ゴルフ全国大会(通称 JGFR)静岡大会を2007年4月9日に静岡カントリー浜岡コースに於いて、島田クラブがホストで開催しました。

全国から120名のロータリアンの方々と奥様方にお集りいただき、8日が前夜祭・9日が本戦・10日が親睦ゴルフと楽しんでいただきました。

JGFRが全国各地の名門ゴルフコースで、年に数回開催されておりましたので、「ぜひ静岡で」と立候補したのが7年位前でした。そのときにはお出で下さる皆さんには飛行機で来てもらうつもりでした。ところが静岡空港の開港は遅れに遅れて2009年3月だそうです。誤算でした。

開催が決まり一年前から準備にかかりました。そのなかでチャリティをやろう、ということになり、当時大会会長を予定していた柳川金雄さんが当クラブの今年度米山委員会委員長(因みに前年度米山委員長は私でした)だったりして、当クラブでも賛成してくれたので「それでは米山梅吉記念館にそのお金を寄附しよう」ということになり、最初から単独の目的を持ったJGFRでは珍しいチャリティとなりました。

さて、当日は写真にあります様にチャリティボッ

クスを置き、強引にお願いしました。気持ち良く入れて下さる方、横を向かれる方、人それぞれです。ご夫婦で来られた方も千円でした。募金総額7万8千

円集まりました。ありがとうございました。

翌日の新聞には、この事が報道され「県内外から120人が参加し、参加者の善意12万円が米山梅吉記念館に寄附される」と出ていました。さあ大変4万2千円足りない。

そこで窮余の一策、一年前から役員に立て替えて頂いていた大会運営準備金を泣いていただきました。これもありがとう。

それにしても米山梅吉記念館が当地区(2620)に在ることを知らない方が多いのには驚かされました。私たちホストである島田ロータリアンも一生懸命PRに努めました。



悲願のポール・ハリス月桂樹四世の植樹なる！

第2650地区 京都乙訓RC 内藤 雅夫

2002年11月、時のRI会長 ビチャイ・ラタクル氏が米山梅吉記念館を公式訪問された。

この時会長職であった私は、友好クラブの伊豆中央RCとの交流のなかで、間近でラタクル氏の温厚な人柄に触れると言う幸運に恵まれた。ロータリー

ならではの出会いに感謝するものです。

その折り、旧記念館中庭に育成しているポール・ハリス縁の月桂樹2世と対面。この感動を育てよう！関西否京都に植樹をしようと言う発想が自然と脳裡に展開した。(館報前号に詳細)

京都に植えたい・・・奉仕の心「他人への思いやり、助け合い、そして役立ちの心」の一念が関係皆様にご理解いただき、この程ようやく思いが叶った。



これも偏に米山翁のお導きと感謝いたしております。

ポール・ハリスが言った「寛容」と共に、素晴らしい香りと雄姿を我々ロータリアンに末永く見せ続けて欲しいと願っています。

関場RI会長代理、平井ガバナー、千 玄室RI元理事による植栽式
平成19年3月31日 国立京都国際会館玄関前中庭にて



米山梅吉記念館を訪ねて

第2530地区 二本松RC 高橋 孝志

我が二本松ロータリークラブは今年で創立45周年を迎えました。50周年を前に今年度は「親睦と融和」をテーマに一年間活動をしてまいりました。年初いろいろ企画をしまして、その中に米山梅吉記念館の訪問と東京ロータリークラブメーキャップという事業をロータリー情報委員会が企画しました。私は入会4年目で幹事を仰せつかりましたのでまだ未熟であり、この企画を通して勉強になるなあと大変楽しみにしておりました。

ロータリー情報委員会の委員長は我がクラブで「米山のスペシャリスト」の異名をとる桑島利力パスト会長であります。桑島氏は何度も米山梅吉記念館を訪問されております。その度に訪問の報告をされておりましたが、今回のように同じクラブのメンバーと一緒に訪問されるのは、もちろん初めてのことであります。4月11日～12日に東京ロータリークラブメーキャップと米山梅吉記念館訪問と題しまして、13名のメンバーがバスで福島県二本松市を出発しまして、一路東京帝国ホテルを目指しました。絶対12時30分の例会開始までには間に合うようにと、朝7時30分に二本松を発ったのですが、その日は東京の街は中国の温家宝が来日とのことで警備などで渋滞が予想されたのですが、反対にそれを敬遠してトラックなどの車両が迂回でもしたかのように、東京の首都高速はガラガラ状態で、思いのほか

早く着いてしまいました。余裕をもって東京ロータリークラブの例会にメーキャップすることができました。東京ロータリークラブはご存知のとおり、日本で最初にできたロータリークラブであります。その立ち上げに尽力されたのが米山梅吉氏であります。会員数338名その日の出席者240名、二本松ロータリークラブが会員数38でいつもの出席が？ですので、その規模約10倍になります。さすが東京ロータリークラブの重みと伝統を感じ、あらためて米山梅吉氏の偉大さに対し敬意を表するものであります。

さて例会が終了、すばらしい感動を残し、翌日の

米山梅吉記念館訪問のためバスは途中、米山梅吉氏のお母様と縁のある三島大社を参拝し、今晚の宿、伊豆長岡温泉へと向かったのであります。

翌朝、天気は快晴。季節柄さわやかな空気が私のからだに感じられ、期待をふくらませ米山梅吉記念館に向かいました。開館時間に合わせぴったり10時に到着、写真では見ていたものの、イメージ通りの外観で記念館の中もことその他綺麗で近代的でありました。

一階にはロビー、事務室、ホール、二階が展示室となっております。館内を案内され、展示室での説明を受けたのですが、その中で一枚の写真が私の目を引いたのです。それは、『ロータリー日本五十年史』79ページに掲載されている写真と同じものでした。その写真は1940年（昭和15年）横浜地区大会が開催された時の写真で、我が二本松ロータリークラブの第13代会長（1974～1975年）故木村英三郎氏が、以前、この写真の中に英三郎氏のお父上木村泰治翁が

写っていることを、当クラブのメンバーに紹介しておりました。その写真そのものです。木村英三郎氏は次のように語っています。

当時日本は軍事国家で「ロータリーの組織機構は日本帝国に対する反逆である」と軍の圧力によって日本ロータリーは離脱解散せざるを得なくなった。この写真は解散直前のガバナーと有志のロータリアンであ



解散直前の1940年、横浜に開かれた地区大会に集った当時のガバナーと有志のロータリアン

り、左から二人目が初代ガバナー米山梅吉氏で当時の三地区のガバナーと、満州、朝鮮、台湾のロータリー代表者が集められたようだ。写真一番左で米山梅吉氏のとなりが木村泰治である。木村の父は、元台北ロータリークラブのチャーターメンバーで、その頃台北商工会議所会頭も務めていたので、台湾を代表していたものと思われる。米山梅吉氏は、東京ロータリークラブ解散に際し次のように述べている。

「重い足を引きずって、私は今ここに立つ、こんなつらい気持ちで皆様に語らねばならぬのは、20年来はじめてである。私はただかかる結末になったこと

をお詫びしたい。時代の流れはあまりにも急激であった。創立以来、20年を顧みる時感慨無量である。この間ロータリークラブがいかに国家に貢献してきたか、その歴史は燦然として輝いている。私の眼底には絵巻物のごとくそれらが彷彿として来る。私はただ皆様にお礼を申し上げ自分の不行き届きをお詫びしたい。」このあと各クラブは解散し、日本のロータリーは昭和24年迄暗い状態が続いた。その時の日本ロータリー会員は2000名、今や13万人の会員を誇る日本ロータリーとなった。私にとってこの写真は貴重な写真である。

(平成8年7月1日二本松RC木村英三郎)

展示室に飾られてあった一枚の写真にはロータリーのこのような時代が語られていたのです。その写真の中の一人が我が二本松ロータリークラブに縁がある人物であったことに、何かの因縁を感じたのは私ばかりではなかったと思います。写真の中の木村泰治翁は明治3年久保田藩大館町(現在の秋田県大館市)久保田藩の代々藩医の七男として生まれ、子供の頃は自由奔放に育てられ、東京英語学校を出て、その後台湾にわたり台湾日日新報の記者となります。その後、台湾土地建物会社の支配人となって実業の世界で成功し、21の会社の社長や取締役など、またロータリークラブなどの約10団体にも関係して、当時の台湾財界の重責を担って、後に初代台北商工会議所会頭となります。その木村泰治が、ひょんなことから現在の福島県二本松市にあります国民温泉岳(現在の岳温泉)を購入することになったのが大正12年で、当時のお金で6万円だったそうです。当時、一泊お酒一本ついて1円だったといいますから、現在のお金に換算したら大変な金額だったと思います。

そんな木村泰治翁の三男・英三郎氏、四男の四郎



氏が、それぞれ我がクラブの13代、19代目の会長を務められたわけであります。このことを改めて参加したメンバーが思い起こし、ロータリーが歴史的にも人的にも関わっているものだと、つくづく感嘆した次第であります。

その後、米山梅吉翁のお墓参りをして帰路の途につきました。今回の米山梅吉記念館を個人としてでなく、クラブの事業として、また東京ロータリークラブのメーキャップと同じく訪問でき、米山梅吉翁の足跡をたどり、彼の功績を改めて知ることができたことに大変な意義を感じました。

今回残念ながら参加できなかったメンバーには、また来年も同様の企画をもって米山梅吉翁の足跡を辿っていただき、ロータリーに関しての勉強する機会と親睦をはかることにより、「奉仕の理想」を鼓吹し、育成していただきたいと思います。

最後に、今回このような米山梅吉記念館「館報」に寄稿の榮譽を与えていただきましたことに、誠に感謝申し上げる次第であります。ありがとうございました。

—100円の細い糸が館と全国を結ぶ—

全国1人年間100円募金運動

(財)米山梅吉記念館

全国ロータリアンに向けて

引続き展開中の運動です。既にご送金いただいた個人、クラブ、地区も相当ありますが、この運動は当分の間、事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動も任意のご意志によってお願いしております。何卒よろしく願いいたします。

お申し込み、振込先

(100円募金)事業資金振込先

郵便振替口座 番号 00820-4-57730

財団法人 米山梅吉記念館

時の流れも止まるかのような
静寂と豊かな自然の中で
四季の彩りを楽しむ。

和の風趣が息づく
全室京風数寄屋造り離れ家の宿

古奈別莊

伊豆長岡古奈温泉

☎ 055 (948) 1225

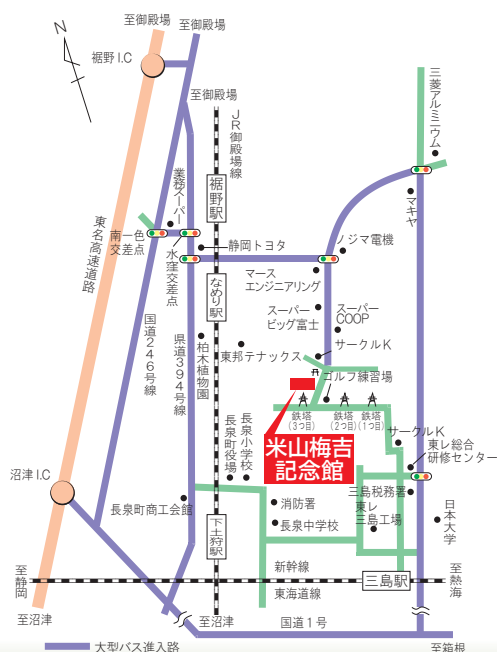
(日本の宿を守る会会員)

<http://konabesso.com/>

開館時間

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館報

Vol. 10

発行日 平成19年 8 月 1 日
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
 URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>
 e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
 印刷 フタバ印刷株式会社